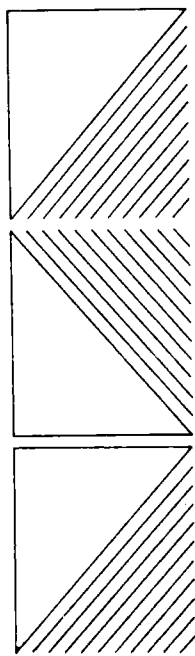
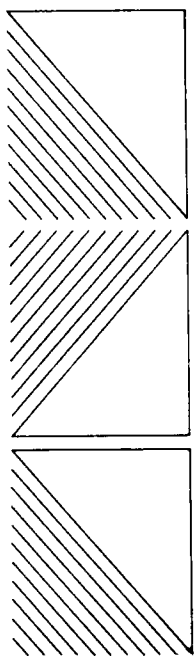


58

柏原兵三作品集 6



潮出版社

柏原兵三作品集 第六卷

昭和四十八年七月二十日 印刷
昭和四十八年七月二十五日 発行

著 者 柏 原 兵 三

装幀者 枡折久美子

発行者 島 津 矩 久

発行所 潮 出 版 社

東京都新宿区南元町一四一
電話 三七一七二一 二二六
振替 東京 六二〇六

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 鈴木製本所

第六卷
目
次

贈り物	185
バラトン湖	163
朗読会	153
クラクフまで	133
小さな石の物語	47
再会	15
トランクの話	7

切手蒐集集……………201

カールスバートにて……………219

ピクニック……………235

帰国前……………257

解説 原体験への旅……………谷口茂 277

柏原兵三作品集

第六卷

トランクの話

ゲート・インスティトゥートの講習を、私はオーストリアのザルツブルクに近い、南独の温泉町バート・ライヒェンハルで受けたが、その講習の二ヶ月間に、私は一度西ベルリンに入った。私の留学地であるこの陸の孤島を一目見ておきたい気持ちに駆られて、どうせそこに一年乃至二年は暮すのだから、講習が終ってから本格的にベルリン入りするまで待てばいいのに、その前に下検分をしておくのだ、という勝手な理由を自分自身のために設けて、講習が始まってから一月目の週末に汽車でベルリンに入ることにしたのである。

バート・ライヒェンハルを立つ時、私は重いトランクを持って出た。先輩のあとを受けて借りることに予定しているベルリンの住居に、不要不急なものを預かってもらおうと思ってトランクに詰めて来たのである。一月後に本格的にベルリン入りする時は、その前に西ドイツを旅行して廻るつもりだったので、なるべく荷物は残しておかない方針で詰めたのだが、やはり手許に残しておかないと不便なも

のが多くて、実際はそのトランクには碌なものが入っていなかった。目ぼしいものは夏服の上下位で、あとはバート・ライヒェンハルで一月を送った間に買い込んだ雑誌類や新聞などが大部分を占めていた。これらの新聞雑誌の類はその中に載っているいくつかの記事のために捨てられないでとっておいたものであったが、バート・ライヒェンハルでは整理ができそうもないので、ベルリンに運んでおいて、いずれベルリンに到着いたらゆっくり整理をしようと思っただけである。

だからそのトランクは紙の重さで恐ろしく重かった。ミュンヘンに着いて、それを持って一旦ブラットホームからホールに出た時、私は音をあげてしまった。ミュンヘンでは三四時間ある連絡時間を利用してこの市に留学している中学からの友人と逢う約束をしていた。ともかくその間だけでもその重いトランクが邪魔だった。私はそのトランクをチッキにしようことを決心した。

チッキを受付ける窓口は地下にあった。それが分らなくて、私はトランクを持って方々を聞いて捜しまわり、漸く捜しあてた時は、そのトランクを交互に持った私の両手はもうすっかり痺れてしまっていた。私はそのトランクを運びながら時々その中に詰められている古雑誌と古新聞を怨めしく思わないではいられなかった。どうしてそんなつまらないものを捨てかねて持ってきたのだらう、と思ったのである。おまけにチッキはタダだと思っていたのに、

料金を四・八マルクもとられた時には、私の後悔の念は極限に達した。

引換券をもらって、漸く身軽になった身体でそこを離れようとした時、私は係員に妙なことをいわれた。国境を通過する時には手荷物に立会わなくてはならない、といわれたのである。立会うって、どこで立会うのですか、と私は訊ねた。係員は首をかしげて、自信のないような声で、駅にある税関の建物の中だろう、といった。私はその時すぐに、国境を通過するのは夜中だったな、ということに気づいた。そしてこれでは夜おちおち眠ってられないではないかと思つた。しかし一旦手続きを済ましてしまったのを今さら解約するのどうかと思われた。それに私のトランクはもう小さな手押車に積まれて奥の方へ運ばれて行つた後である。私は夜よく眠れないかも知れないのを覚悟することにした。

今私の手許にあるドイツ国鉄の時刻表を見ると、この係員のいつたことは間違ひであつたことが分る。旅行者が国境の検査で手荷物に立会わなくてはならない、ということはその本のどの頁にも記載されていないからである。しかしその時私はその係員のいつたことを何の抵抗もなく信じた。厳しい検査をすることで鳴る東独国境だから、そういうことは充分あり得ると信じられたからであらう。

友人夫妻にミュンヘンの中華料理屋で御馳走になつて満ち足りた腹を快く意識しながら、私はミュンヘン二十時発

の夜行列車の客となつた。もつとも私は中華料理を食べながら、チッキの係員の注意が気になつて、友人に確かめてはいた。すると友人もそういうことはあり得るかも知れないな、と覚束ない口調でいつたのだ。彼はすでにベルリンを訪ねていたが、往復共に飛行機を使つていたので、まだ汽車の旅は知らなかつたのである。私は往きは夜行列車を使つたが、帰りはベルリンに一泊して昼間の列車を使うことにしていた。そうやって当時入ることが難かしいといわれた東独を、たとえ車窓からでもいい、見てみたいと思つていたのである。どうして飛行機にしなかつたのだい、という友人に私はその理由を説明しなくてはならなかつた。西ベルリンと西独の主要都市をつなぐ航空便は往復切符を購入すれば大幅な割引があつて、料金の面では汽車賃と大した開きがなかつたから、友人がそう質問するのも無理はなかつた。

簡易寝台車の車房に入るともう寝台の用意が出来ていた。私の相客五人はみんな女性であつた。彼女らはみんな大きなトランクを車内に持込んでいた。私は彼女らにチッキの係員の注意の真偽を確かめてみた。すると彼女らの中にはこのベルリン^{ライプツィグ}の汽車で荷物をチッキにした経験者は一人もいなくて、全然知らない、という返事が戻つて来ただけだつた。中の一人は、チッキにするとチッキ代をとられるから、わたしはチッキにしないことを原則としている、といつた。

汽車が走り出して三十分と経たないうちに私たちはみんな自己紹介をしあっていた。若い三人の女性はいずれも洋裁店に勤めているお針子であった。彼女らは連れ立ってミュンヘン旅行を試み、今帰るところだったのである。一人は六十過ぎの老婦人で、西ベルリンにいる妹の家を訪問するところであった。あとの一人はまさしく悲劇の主人公であった。彼女は父親が死んだという電報をもらって、急遽駆けつけるところなのであったが、果してその葬式に間に合うかどうか分らないのだった。つまり彼女の亡くなった父親は東ドイツの住民で、彼女は西ベルリンに着いたのち、西独市民ならば二十四時間以内という条件で滞在することを許される東ベルリンに入って、その電報を見せて当局にヴィザを発行してくれるようにという交渉をなしたのではないことには、肝腎の東独の中へは入れないのであった。

きっと大丈夫よ、と老婦人がいった、そういう場合はヴィザを出す筈よ、わたしはそういう例の一つ知っているわ、そうでしょうか、と二人の子持ちだというその女の人は、泣き腫らした眼をしていった、大丈夫入れるでしうか……

私は四人の女性たちから（というのは父親の死に遭った女の人は早々に私の向い側の一番上の寝台に上って、毛布をかぶって寝てしまっていたからである）色々と日本についての質問を受け、その一つ一つに答えなくてはならなかった。老婦人は、日本人は筆で字を縦に書くそうだね、と

いってしきりに感心していた。私は今では筆は余り使わないということの説明したが、文字を縦に書くというのがそんなに不思議だろうかと思うとおかしかった。

間もなく車掌が検札に来た。私は彼に、気がかりになっているチッキの係員の注意の言葉を確かめた。すると彼もそういうことは充分にあり得る、と曖昧に答えて、否定も肯定もしなかった。

検札が終わると同室の女性たちは寝仕度を始めた。彼女らが寝間着姿に着替える間私は気を利かして廊下に出ていなくてはならなかった。しばらくして私が入った時には、どの寝台にももうカーテンが引かれていた。私は最下段の自分の寝台に洋服のままごろ寝を決め込むことにした。国境駅で手荷物の検査の立会をしなくてはならないとすれば、寝間着などに着更えられる道理はないと思われたからである。西独国境駅であるルートヴィヒスシュタットに列車が着くのは零時三十八分であったから、三時間余りはたっぷり眠れる勘定であった。友人に御馳走になった中華料理で腹がふくれていた上に、友人夫妻と三人で空けた一本の葡萄酒の酔いのせいがあったのか、私はすぐに眠りに入ってしまった。そして私は夢を見た。女人国にさまよい入って、女人国のアマゾンたちの食膳に供せられようとしている荒唐無稽な夢であった……

突然私は話し声に目を覚まされた。車房の中が明るい。あわててカーテンの隙間から外を覗くと、西独の国境に着

いたらしく、青い制服を着た男が、女性たちの身分証明書を見て、調べる場所だった。時計を見ると零時四十六分であった。私は上着の内ポケットからパス・ポートを取り出し、私の番に備えた。すぐに私の番となったが、検査はあつけない程簡単だった。制服の男はちょっと中を見ただけで、すぐにまたパス・ポートを私に返してくれたからである。

男は車房の電灯を消してまた出て行った。まもなく汽車はゆっくりと走り出した。愈々汽車は西独の駅ルートヴィヒスシュタットを離れて、東独の国境駅プローブストツェラに向かったのである。いつの間にか目はすっかり開き、緊張のためか頭は冴えていた。私は寝ながらゆるめてあつたネクタイを直した。手荷物検査の立会に備えようと思つたのである。

七八分で汽車は停まった。私はカーテンをそつと開けて、身乗り出し、靴を履いた。そして車房のドアを開け、低燭光の電灯がぼんやりと照らしている廊下に忍び出た。チッキを出した者は駅の税関検査室に来るように、とか、手荷物車に出頭するようにとかいった類のアナウンスがあるだろう。そうしたらすぐに駆けつけようと思つたのである。しかし耳を澄ましているのにそういったアナウンスは一向になかった。

手風琴のように鞆を胸に下げた男が乗り込んで来て、一つ一つの車房のドアを開け、中に入っては何か説明しながら、

ら、段々と近づいて来る。私の耳が「通過ヴィザ」という言葉と「外国人」という言葉を別々に捉えた。外国人のための通過ヴィザを売りに来たのだ、ということを知り、私は理解した。車内には通過ヴィザを売りに来るから、必ず往復を買えよ、とミュンヘンで中華料理を御馳走してくれた友人に注意されたことを私ははつきりと思い出した。そうでないといふと、ベルリンを出られなくなるというのである。もっとも本当は東ベルリンに入つて東独の外務省のヴィザ発行所で帰りの通過ヴィザをもらつて来れば、出られないことはないのだということがあとで分つたが、それは一日かかりかねない厄介な仕事だった。友人は注意を強めるためにそのことをいうのを省略したのか、本当に知らなかったのか、ともかくそういつて私を嚇したので、私はそのことを鮮明に記憶に留めていたのである。

十マルクと引換えに私は往復の通過ヴィザを手に入れた。その男は更に私たち一人一人に紙つべらを一枚ずつ渡し、これに所持金、トラヴェラ・チェックの額を直ちに書き込み、西ベルリンに入る前の検査の折に係員に提出する時まで保管せよ、といった。その時私はチッキの立会検査について質問することを忘れなかった。男は怪訝そうな顔をして、そんなことがあるのを自分は知らない、といつて立去ってしまった。

やがてビストルを腰に吊るし黒い長靴を履いたカーキ色の制服姿の兵隊が二人パス・ポートの検査にやって来た。

彼らのうちの一人はニコリともしないで私のバス・ポートを注意深く調べたのち、貼りつけてある写真と私の顔をじっと見比べて首実験をした。

二人の兵隊が行ってしまつてから、私はチッキの立会検査について質問するのを忘れていたことに気がついた。追いかけて行って聞こうと思つたが思い留まることにした。聞いてもその無愛想な兵隊からはどうせ満足な回答は得られないであらうという予感がしたのである。

やがて二人連れの兵隊がまた一つ一つの車房に入つたのち近づいて来た。一人が廊下に立っている私に向かつて、お前の車房はどこだ、といった。私が自分の寝台を指し示すと、そのカーテンを開け、そこが空であることを確かめたのち、私のバス・ポートと通過ヴィザと所持金の申告書の一つ一つを注意深く点検したのち、胸の上に写生カバンのように持っている検印台で検印を一つ一つに押したのち最後にもう一度バス・ポートの写真と私の顔を見較べるという嚴重さを發揮した。

これで検査は終りだろうか、と私は訊ねた。そうだ、と兵隊の一人が答えた。手荷物車はどこかと私は訊ねた。この先だ、と兵隊はいぶかしげな顔をして答えた。

これだけ確かめたのち私は歩き出した。ともかく手荷物車に行ってみようと思つたのである。もしかするとそこでチッキの検査が既に行われ、私の出頭を待っているかも知れないではないか。そしてそのために汽車は発車できない

でいるのかも知れないと思つたのである。しかしいくら歩いても手荷物車になかなか私は辿り着くことができなかった。私はブラットホームに出て、駅員を捜しあて聞いてみようかと思つた。そう決めると私は途中のデッキで重い扉を開け上半身を乗り出してブラットホームの様子を窺つた。裸電球がいくつも屋根の剝き出しの天井からぶら下つてブラットホームを薄ぼんやりと照らしている。寝鎮まつた駅のように駅員の姿はまったく見あたらない。自動小銃を肩に背負つて立っている兵隊の姿がブラットホームの両端に見えた。赤い布切れがはるか向うの駅舎の壁に下っているのが目についた。「生産を増強せよ」といった類の標語が書かれているのだ。

「そんなところで何をしているのだ」という声が私の背後でした。振り返るとさっき私を調べた兵隊が鋭い目つきをして私を睨みつけている。腰に吊したピストルが気味悪く光っている。私が理由を説明すると、そんなことは行われないう、もし行われたとしても、必要があつたら呼びに行くから、お前の車房に戻っている、ふらふら外に出たりするのではないぞ、という意味のことを彼は早口でぶっきらぼうに喋つた。

私は仕方なしに彼の命令に従つてまたいくつもの車輛の廊下を渡り歩いて、自分の車房の前に辿り着いた。——すると間もなく、汽車はゆつくりと走り出した。私は相変らず廊下に立っていた。ふと私は兵隊たちはきつともう降り

てしまったに違いない、と思った。それなら手荷物車に私が行くことはもう咎め立てされないだろう。私は手荷物車に行つて、私のトランクがそこに無事にあるかどうかともかく確かめてみよう、とまた思い立った。

今度は途中でへこたれずに歩き続けた。いくつもの連結台を越え、いくつもの長い廊下を渡つて、とうとう私は手荷物車に到達した。すると手荷物車はがらがらで、そこに置いてある荷物といったら、私のトランクと乳母車が一台あるだけだった。トランクは私のに間違いない。ありふれた型だったから他人のトランクと間違えるという可能性もあったが、私の名前がちゃんと読めたからである。そのトランクの中味のことを考えると急に私はそのトランクのために右往左往して心配したことが馬鹿馬鹿しくなつて来た。私はすぐに引き返して、寝台に入り、眠りに就こうと思った。しかし踵を返す前に、私は金網のドアを通してもう一度荷物車の中を覗いて私のトランクの存在を確かめた。列車の振動で動いたのか、乳母車が私のトランクの近くに寄つて来ていた。そして乳母車とトランクがひそひそと話をして私の心配を笑っているように思われた。

西ベルリンに入る前にもう一度検査があった。今度の検査はブロープストツェラでの検査よりもっと嚴重だった。シートの下を確かめただけでなく、毛布まで剝いで見たからである。大きなトランクは中を点検した。その中に人が

隠れてはいはないかという疑いからである。

検査が一段落すると私はまた廊下に出た。私のトランクの立会を命ぜられたら、すぐ出頭のできるようにしようと思つたのである。新聞雑誌が中味の大部分とはいつても、夏服も上下一着入っていたし、トランクそのものの本体も大切だから、立会人が出頭しないために没収などということになつてはやはり困ると思ひ直したのである。

さっきの経験に懲りて、私は兵隊に、これから手荷物車に行くがよいか、と許可を求めた。彼は怪訝な顔をして、よろしい、といった。私は急ぎ足で荷物車をさして、再び、いくつもの連結台を越え、いくつもの長い廊下を渡つて行つた。途中で兵隊が便所の中を調べているのに出会つた。彼は私をうさくさうに見たが、別に呼び止めもしなかった。

私は手荷物車の金網のドアの前に立つて、中に置かれている私のトランクと乳母車を見た。トランクと乳母車は寄り添うようにそこにいた。

今度も私のトランクは調べられなかった。私のトランクはそんなに大きくなかつたから、そこに人が忍んでいるのではないかという嫌疑を最初から免れていたのだろうか。私は網戸の前でいつでもトランクの鍵を出して立会えるような態勢を整えて待つていたが、それは徒勞に終つたようであつた。

やがて汽車は再びゆつくりと走り出した。そして間もな

く、私はデッキの扉の窓から汽車が遂に私の留学の地西ベルリンに入ったことを知った。

